



TITLE:

# 母性社会の問題と超自我・自我理想の崩壊: 父系(権)社会・母性社会 日本の歪み

AUTHOR(S):

東山, 紘久

---

CITATION:

東山, 紘久. 母性社会の問題と超自我・自我理想の崩壊: 父系(権)社会・母性社会日本の歪み. 京都大学大学院教育学研究科紀要 2001, 47: 118-133

ISSUE DATE:

2001-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57418>

RIGHT:

# 母性社会の問題と超自我・自我理想の崩壊

—— 父系（権）社会・母性社会日本の歪み ——

東 山 紘 久

Problems of Maternal Culture in Japan and weakened Super-Ego

key words ; Maternal-Culture, weak Super-Ego, Family-Problems

HIGASHIYAMA Hirohisa

## 1. 問 題

子どもの問題が、これほど注目されている時代も少ない。いじめ、不登校、校内暴力から始まり、学級・学校崩壊、薬物乱用から虐待まで、果ては、実子に保険をかけて殺害するような犯罪さえ起っている。これは、日本だけでなく、先進国共通の問題であり、アメリカの方が上手に行くのではないかとさえ思われる。校舎での薬物売買をはじめ、学校で銃を乱射し多くの級友を殺害したり、小学校の低学年の児童が友達を銃殺するようなことがアメリカでは起っている。子どもの問題の原因は、「子どもを取り巻く社会環境というものは、『表層』で解けるものも、その国の人とおなじくらいにその国の風俗習慣を理解し、その言葉も理解しなければどうしてもわからない、そういう中間段階もある。もっといえば、何百年もおなじ土地に生活しているものの子孫というか、そうでないとどうしてもそこまでわからないよという問題もある。（文献3-pp. 162-163）」と、吉本隆明がいうように、奥の深い問題を秘めている。今回は、この問題に対して、グローバルな面から始めて、わが国固有の文化との、接点に迫ってみたい。

わが国には、近世から現代まで3度の黒船が来襲している。一度目は江戸末期から明治初期のそれであり、二度目は敗戦にともなう占領軍の来日である。そして、三度目が現在、金融再編成を中心とするグローバル・スタンダードを基準にする再編への圧力である。これら三度の異文化の取り入れは、それぞれ日本に大きな影響を与えている。日本は外圧がないと変わらない国だといわれている。それだけに外圧が高いときは、システムや気持ちの流れの変化が著しい。明治6年の太政官布告によって、江戸時代と違って、女性の方から離婚を提起できるようになったことが、明治初期から中期までの離婚率を、わが国史上最高のものでした。この時の離婚率の高さは、昨今の比ではない。憲法制定から鹿鳴館まで西欧文明の取り入れは、わが国の政治や経済のシステムに大きな影響を与えた。しかし、明治中期になると、わが国の文化に沿わない政治や制度は自然に消えていった。

敗戦による、政治と経済のシステムの改革は、憲法から民法までが大幅に改定された。憲法の

改正は、それまでの侵略主義の是正から、戦争の放棄が一つの眼目ではあるが、それよりも国民生活を変えたのは民主主義と平等の精神であろう。民法の改正により、相続法規が変わり戸主権がなくなったことは、家族に大幅な変化をもたらした。国粹主義から欧米文明の取り入れは、明治時代をはるかにしのぐ勢いで、日本の経済生活を豊かにした。しかし、戦後60年を経て、日本の民主主義は欧米のそれと違って独特の特徴を持つ民主主義を発展させている。そして、なぜか刑法だけが改革を経ないで今日まで来ており、少年法の改正や無期懲役のありかたなどで論議が行われているくらいである。刑法が改革されなかったということは、罪と罰に対する基本姿勢が、変わらなかったことを意味している。ベネディクトが、西欧の「罪の文化」に対して日本の文化の特徴を「恥の文化」と呼んだが、罪と罰に対する基本的考え方は、その国独特の文化を基底にしているからであろう。河合隼雄は、西欧の社会を「父性社会」、日本のそれを「母性社会」と名付けたが、「母性」「父性」ともに、グローバル的に変化してきているのが、現在ではないかと考えられる。本論文では、日本社会がグローバル・スタンダードの波にさらされる中で、母性社会が持っていた、社会のケジメや「恥」による抑制の変質と喪失が論じられる。

## 2. 父系（権）社会と母系（権）社会

父系社会においては、男性は子どもを育て、自分の財産や社会的地位を、子どもとくに息子に相続・継承させるのが普通である。それにたいし、母系社会では、祖母、母、娘というように、代々女性の血縁関係（出自）をたどって、社会集団（家や家族）をつくりあげ、相続・継承の方法を決定する。男性の血縁というものはまったくといっていいほど役にたたない（文献1-p.9）。だから、母系集団は夫婦関係でなく、兄弟姉妹関係を軸に形成される（文献1-p.13）。家族の権威は、母権的文化では、父親によってではなく、ふつう母方の叔父によって代表される（文献4-pp.97-98）、のである。

このような社会集団の特徴として、姓・相続・夫婦の居所（嫁入り婚・婿入り婚）・墓が、父系社会では父方（夫方）に、母系社会では母方（妻方）に所属する。わが国では、嫁入り婚が一般的であり、墓も父系の家の墓に妻も入る。相続に関しても、男子の長子相続が戦前まで行われていた。結婚すると父方（夫方）の姓を名乗るのも普通だった。戦後の民法の改正で、男女は同権になり、子ども間の相続が平等になった。戸主権が廃止され、結婚後の新戸籍では、姓を名乗った方が戸籍筆頭者となった。戦前では当たり前であり、最近は少しずつ変化してきているが、それでも男性の姓を名乗り、男性方の墓に入る妻がまだまだ多い。このことから日本は父系（権）社会だと言っているだろう。少なくともすこし前までは。なぜなら、現在、夫婦別姓の問題、夫の墓に入るのを拒否する妻の増加は、日本の父権の在り方の変化に関係していると思われるからである。

日本は、おそらく部族国家の成立までは、母系社会の国であった、と思われる。それが社会の仕組みが大きくなるにつれて父系社会へと移行していった。それでも基底の文化は、母性社会のそれを現代にまで色濃く残している。未開の母性社会と、現代日本社会を比較すると、大いに共通した心理構造を見いだすことができる（文献6-p.162）、と小此木啓吾は述べている。母系社会の名残として、（徳川時代）妻の財産を夫が勝手に消費して、なくしちゃったという証拠がすこし

でもあれば、三くだり半は無効になる。明治以降になって、はじめて男性優位の社会になった、と理解するのが、妥当な理解のしかたなのである。女性があからさまに男性より給料が少ないとか、いろんなかたちで不利になっているのは近代以降なのである（文献3-p.251-252）。

母系社会は、父系社会にくらべ社会のしくみとしては弱い、と見なされている。したがって、母系社会は、父系社会の影響、人口の増加、貨幣経済の波及などの要因で、たちどころに崩壊してしまうともいわれてきた（文献1-p.14）。最近まで母系社会であった、ミクロネシアでは、政府職員に採用され、給与を得る人が出るのにしたがって、母系社会が崩れていった。キリスト教の導入にも崩れなかったものが。もともと牧畜社会には母系社会は、ほとんど存在しなかった（文献1-p.18）。西欧が父系社会中心であったのも、これが一つの要因であろう。また、大規模な王国や高文明を育てた国のすべては、父系社会である。先進国が父系社会であることは、大きな社会を動かすには、父系社会的システムが必要なのである。

### 3. 政治システムと文化システム（父系・母系社会と父性・母性社会）

母系社会・父系社会は社会の政治システムである。母性社会・父性社会は、社会の文化システムである。政治システムの変化に比べて、文化のシステムの変化は遅い。変化が遅いのは、人間の精神性に基づく文化の基底を作っているからでもある。

母性社会とは、母性文化に根ざしている社会であり、父性社会とは、父性文化に根ざしている社会である。河合準雄によると、母性の原理は「包括する」機能によって示される。それはすべてのものを良きにつけ悪きにつけ包み込んでしまい、そこではすべてのものが絶対的な平等性をもつ。「わが子であるかぎり」すべて平等に可愛いのであり、それは子どもの個性や能力とは関係のないことである。母性原理はその肯定的な面においては、生み育てるものであり、否定的には、呑み込み、しがみつき、死に到らしめる面を持っている。これに対して、父性原理は「切断する」機能にその特性を示す。それはすべてのものを切断し分割する。主体と客体、善と悪、上

と下などに分類し、母性がすべての子どもを平等に扱うのに対して、子どもをその能力や個性に応じて類別する。極端な表現をすれば、母性が「わが子はすべてよい子」という標語によって、すべての子どもを育てようとするのに対して、父性は「よい子だけがわが子」という規範によって、子どもを鍛えようとするのである。父性原理は、このようにして強いものをつくりあげてゆく建設的な面と、また逆に切断の力が強すぎて破壊に到る面と、両面を備えている（文献22-pp.9-10）。

上記のような基準で、その国の社会システムを政治と文化に分けると、理論上4つのタ

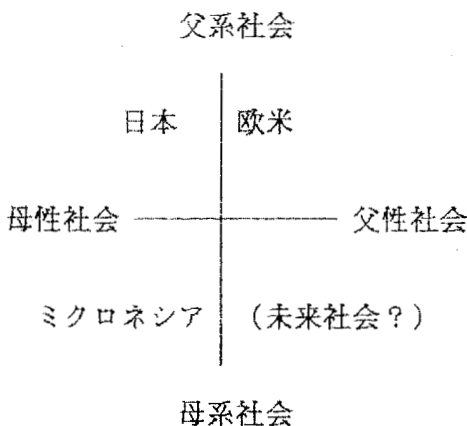


図1 父系・母系、父性・母性からみた社会システム

イブがあることになる。すなわち、母系社会・母性社会、父系社会・母性社会、父系社会・父性社会、母系社会・父性社会である。社会の成り立ちからすれば、多くの国では母性社会の方が先なので、最後のカテゴリーの母系社会・父性社会の国は実際には考えにくい。しかし、更なる文明の進歩の欠点を補う意味から、未来社会は母系（権）社会で、父性社会の構築にあるかも知れない。

この基準から考えると、日本は、父系社会の母性社会の国だと言える。

#### 4. 超自我と自我理想

超自我という概念を作ったのは、フロイトである。超自我とは、自我が成長の過程で両親のしつけという形で本能的欲求の禁止を取り入れて内在化させたものが、独立の精神機能となったものである。「良心」や「道徳律」はその機能の一つである。超自我は「自我理想」として自我に健康な規範的影響力をもつが、無意識の圧力としても現れる（心理臨床大事典）。

超自我の形成過程は、フロイトによると、エディプス・コンプレックスが崩壊するときには、すなわち、母との同一視か父との同一視の強化のいずれかである。通常、男子は父親と女子は母親との同一視が強化される。エディプス・コンプレックスが衰微することによって、男児の性格の男らしさが堅固なものになるだろう。これとまったくおなじふうには、女児のエディプス状態は母との同一視の強化におわることになり、それが女らしい性格をあたえる（文献2-pp. 270-271）。エディプス・コンプレックスは、単純な場合、男児にあっては次のように形成されていく。おさない時期に母に対する対象充当がはじまり、対象充当は哺乳乳を出発点とし、依存型の対象充当の元型を示す。男児は同一視によって父をわがものにする。この二つの関係はしばらく併存するが、後に母への性的願望がつよくなって、父がこの願望の妨害者であることを認めるにおよんで、エディプス・コンプレックスを生じる。ここで父との同一視は、敵意の調子をおびようになり、母に対する父の位置を占めるために、父を除外しようという願望に変わる。そののち、父との関係はアンビバレント（両価的）になる。この父にたいするアンビバレントな態度と母を単なる愛情の対象として得ようとする努力が、男児のもつ単純で積極的なエディプス・コンプレックスの内容になるのである（文献2-p. 272）。超自我とはエディプス・コンプレックスの遺産であり、したがって、エスのきわめて強力な興奮と、もっとも重要なリビドーの運命を表現するものである。超自我をつくることによって、自我はエディプス・コンプレックスを支配し、同時にみずからエスに服従する。自我が本来、外界現実の代表者であるのに反し、超自我は内的世界、つまりエスの代理人として自我に対立する。われわれが述べようとする自我と理想とのあいだの葛藤は、結局は現実と心理、外界と内界との対立をうつすものである（文献2-p. 276）。

抑圧する審級は超自我と呼ばれ、昇華する審級は自我理想と呼ばれる（文献4-p. 72）。社会的感情は、共通の自我理想に基づく他人との同一視の上に立っている。宗教、道徳、社会的感情は元来一つであった。これらは系統発生的に父コンプレックスから得られ、宗教と道徳的制約は本来のエディプス・コンプレックスを支配することにより、また、社会的感情は若い世代におこる競争をなくす必要性によって得られた（文献2-p. 277）。

超自我の背後には、個人の最初のもっとも重要な同一視がかくれている。その同一視は両親と

の同一視である（文献2-pp.269-270）。

ここに超自我の形成や自我理想の形成に、子どもが誰をモデルにどのようにこれらを形成するかが大きな問題となる。しつけが厳しいと厳しい超自我が形成されるのではない。むしろ、ラカンが述べているように「超自我が主体の諸機能を抑制する厳しさは、しつけの実際上の厳密さに反比例して確立されがちである（文献4-p.90）」と、逆なのである。それは、子どもが同性の親のイマージに同一化しているからこそ、超自我と自我理想は経験に対してこのイマージの細部に合致する諸特性を明かすことができる（文献4-p.91）、からである。このことは、父親のイマージの弱まった諸形態では、昇華エネルギーをその創造的方向からそらせ、自己愛的状態のなんらかの理想のなかへ閉じこめてしまうのを助長するような損傷を、強調することができる。父親の死は、それが発達のだんな段階で生ずるにせよ、エディプスの完成度に応じて、同じく現実の進歩を凝固させることにより枯渇させがちである（文献4-p.96）。フロイトは、父性とは、まず子どもたちに対して、自分自身が自分の欲望を克服し、衝動を抑えこんで、それらと戦い打ち克っていくことに模範を示すような父親像—それが真の父性像であり、自分の衝動や、エゴイズムをほしいままにするような専制君主は決して父性的なものではないのである、と（文献5-p.32）述べている。だから、父親のイマージの役割は大部分の傑出人の形成のなかで驚くほど認められる。さまざまな心理学的結果が父親のイマージの社会的衰退に伴伴しているようにわれわれにはみえる（文献4-p.107）。

父性の権威と規範を喪失した子どもたちの間に、どうやらこの社会特有の病理を体現していると思われる病状が目立ってきたのである。例えば、家庭内暴力、手首などへの自傷行為、シンナー中毒、やせ症、などである。プロンフェンブレンナーは、父が男らしい厳しさと優しい愛情を兼ね備えている時に、息子の男らしさの発達が最も促進される。子どもの道徳性や倫理感、子どもは自分を叱ったり叩いたりする父親の現実の態度に同一化するのではなく、父親自身のもつ道徳感や倫理感に同一化する。モールトンは、現実の親の養育態度と罪悪感の関連について調査し、両親が愛情深い態度で養育に当たり、日常の躾けの面は父親が担当し、適切な叱責を加えるような場合に、子どもの倫理感が発達して、罪悪感が生じやすくなる。マッコードは、父親がもし自己抑制力をもつ毅然とした男性としての役割を保てば、子どももまた自己抑制力を発達させることができる、と述べている（文献17-pp.23-25,27）。このような過程は、父性文化を色濃く持ったユダヤ人のフロイトをして、考えつかせたものである。それは、父性文化を中心とする近代ヨーロッパで、一番よく当てはまる考えであった。日本を考えると、日本も父権社会であるので、社会システムが父権を擁護していた時代には、一応は妥当しているように思われる。しかし、日本文化は、その基底が母性社会であるため、父権の擁護システムが無くなり、父権のイメージが衰退した時、欧米とは異なる様相を現出することが予想される。

## 5. 超自我衰退・喪失の時代

小此木啓吾が指摘するように、現代は、昔、フロイトがいったような意味での超自我、あるいは、普遍的な内的な規範が、内在化しない文化の時代になってきている。それを反映して、子どももまた、このような機能を家庭教育のなかで身につけることが難しくなっている。親たち

も超自我的な批判原理というものをだんだん失ってきているからである（文献5-p.155）。そして、今の社会そのものが、自分自身の欲望に打ち克つことよりも、欲望をいかに満たすか、という術の発達した人間のほうが、社会への適応性がある。自分の欲望を抑えつけて我慢したからといって、それが社会で適応しない時代になってきていることが「父親不在」の背景にあると考えなければならない（文献5-p.32）。現代の子どもは、昔に比べて自由になっただけに、先生（親）を理想化することが、なかなかできない。何かといえば、すぐに先生（親）に対して悪いイメージをもつ（文献5-p.159）。また、教師の持つ権威性の弱さは、教師の中にも、カリスマ的人格特性を持った人が少なくなり、些細なことについても親が教師に対する批判的な言辞をもたらすため、教師の生徒に対する権威性の獲得が、ますます困難になって来ている（瓜生武，文献17-p.77）。その結果、有効なルールと抑圧がなくなった。かつての家族の間には、しっかりした秩序とルールがあった。ところが、現代の社会では、対人関係の距離を規制する規範、道徳、礼儀などのルールが急速に失われた（文献6-pp.58-59）。これが父親不在といわれる現象である。父親不在とは、父親が家庭の中で明確な存在感を持たない事実を意味している。父親の存在感とはもともと物理的なものではない。むしろそれはひとつのイメージであり、感覚的なものであるよりは理性的なものであり、無言の力、権威を持つものとしてであり、何らかの威光をもつという意味においてであった。父親のイメージは、家庭内で指導力を発揮する。裁判官的な判断を下す、規律やルールを維持するための監督者である（文献6-pp.146-147）。父性原理に基づいたユダヤ・キリスト教的な文脈での父親像から見れば、むしろ現代の父親は、父親と呼ぶことのできないような存在なのである（文献7-p.64）。

## 6. グローバルに起こっている父性の弱体化

父親の権威が失墜してしまったということを耳にするようになってから既に久しい。それは日本だけのことでなく、ヨーロッパやアメリカでも、いわゆる先進国といわれる国々では共通して見られる現象である（安溪貞一，文献17-p.97）。

グローバル・スタンダードは、契約主義と能力主義による自由競争が基本である。関税障壁の撤廃や規制解除は、それらの障壁が自由競争を妨げるからである。契約主義の特徴は、その背景に能力主義、あるいは達成主義が大前提として確立していることにある（文献5-p.95）。人間関係の基本はつながりと相互援助である。親子や友達間に競争原理や達成主義が持ち込まれたら、能力格差と幸運などで、達成格差が拡大し、人間関係は崩壊する。このような観点が増大すると、教師は生徒から見てただの人であり、その先生の技能や教師としての能力が、客観的に生徒たちの評価の目にさらされる。教師が自分自身の能力をたのみにして、教育者としてやっていけるかどうか、いまの教師たちに問われているのである。教師自身も、いままでのような「縁」の関係のなかに安住することなく、アメリカ的な達成主義、能力主義を身につけなければならない時代が到来しているといえる（文献5-pp.98-99）。これはこれで現実ではあるが、しかし、これでは学校はすべて予備校となる。確かに、教師自身、従来の社会慣習から抱かれていた教師イメージに安住し、自己の実力とイメージの乖離に気づかず、いたずらに生徒を抑圧していた嫌疑はある。かといって、教師が持っていた超自我イメージの崩壊は、教師の精神的な薫育の雰囲気学

校場面から奪う。学校が、特定の社会に有用で、生徒や保護者が望むことにだけを教える場になる。個人の要求は個人的なものである。それは集団全体を視野に入れていない欠点を持つ。能力主義と達成主義を望まない（望めない）生徒は、学校から落ちこぼれて行くことになる。この根底に横たわる要因の一つとして、「いまの教育問題は、あまりに早くから、親や教師の理想化・神格化をしなさすぎるようなところにあるような気がする（文献8-p.177）」、という指摘は、マスコミによる情報化の欠点と相まって考慮すべき視点を与えている。

このことが親子の間にも起こってくる。特に、社会が風潮として持っていた父親イメージがなくなると、「日常の家庭生活の中で、父親がいなくて困るどんな機能が残っているというのか。家庭外で収入を得、その収入を家庭内に運んでくる以外に、ほとんどの機能は父親なしで済ますことができる（文献6-p.187）」、ということになってしまう。

このようなことが、今、世界の先進国で起こっている。小此木啓吾はそれを「社会のモラトリウム化」と名付けている。彼の記述によると、昔は、家族神話が存在し、先祖代々受け継がれた言い伝えやしきたりがあり、誇りや名誉があった。それは、家族アイデンティティと呼ぶことのできるような歴史や伝統を持つものであった。その家族神話に恥じることのない行動の仕方とか物の考え方があった。ところが現代社会では、このような家族アイデンティティと呼ぶにふさわしい秩序をもち、それを子どもに伝えるような家庭が急速に解体した。家族アイデンティティは失われ、どの家族も家としての伝統から切り離された根無し草的な核家族になってしまった（文献6-p.192）。特に、この傾向を、旧来の父性原理の解体という言葉で語ることでもある（文献6-p.179）、としている。家風という言葉が死語に近い言葉になり、家族の特徴も、町の特徴もなくなった。今は、どの家を訪れてもどの町を訪れても、表面上は、風景も雰囲気もあまり変わらない。

## 7. 父権社会・母性社会日本の特質

### 7.1 社会システムとしてのイエ

わが国においては、「イエ」の存続ということが、すべての人にとって最重要であったことをよく認識しておかねばならない。それは必ずしも血縁を重視していない。このような「イエ」重視は、アジアの他の諸国によく見られる血縁重視の家族主義でない点をよく知っていないとはいけない（河合隼雄、文献15-pp.4-5）。イエの観念は、江戸時代の武士階級と豪商の家督相続を法制化（民法化）したのではないかと、筆者は思っている。この時に、皇室典範も作られた。庶民にはイエと結びつく「禄」もないし、相続する財産もない。人別帳の必要性から、むしろ地域や寺との結びつきの方が強かった。イエは、氏（姓）を持っていなければ成り立たない。明治まで庶民は、氏を持っていなかった。農耕民族にとって土地は大切であるが、明治時代までは、土地は領主のものであった。不在地主という大地主が現れたのも、明治以降である。欧米の私有財産制と相続法ができたからである。このように見てくると、イエの観念そのものは、100年少しの歴史しかもっていないといえる。しかし、どうしてイエの観念が明治時代に急速に国民全体に広がったのだろうか。それは、イエの観念が母性文化の基本となる「ハハ」と結びついていたからであろう。



それからは、一般庶民においても、長子による単相統が行われていて、この制度による家族形態がイエと呼ばれ、そこでは、父＝息子の関係が優勢であったとされている（文献 16 -pp. 19-20）。それでも、祖父江は、「日本は単に父＝息子（の間柄）を優勢とする社会である、とする考えもあるが、その結論は誤っている。なるほど、事実日本では、父親が強い権威をもち、また父系の血統が強調される。だが、私はそれと同時に、情緒的な面では、母＝息子の間柄が非常に重要だ、ということを指摘しなければならない（文献 16 -p. 21）」と、している。日本の母親が、しばしば父親に隷属していくとみなされても、それは相手に帰依したためでなく、制度的な面からの圧迫が、有無をいわさぬ力を発揮していたと考えるほうがよさそうである。このようなとき、母親は家長としての父親に、精神的な意味において帰依するのではなく、波風を鎮め、同時に自分の身を守るために、これに逆らわない。あるいは、むしろ積極的に、これを立てるのである（文献 16 -p. 28）。

「家の観念」である家（イエ）は、知られるとおり、明治民法において、戸主権と長子家督相統を基本とした家族制度にとして、法律上ははっきりとした形を与えられたのだが、敗戦後、昭和 22 年の民法の改正によって、これまた法律上では廃止された（文献 16 -p. 3）。

家の観念が法律上消え去ったとき、父イメージを支えていた、枠組みが取り去られた、ということになる。日本の家族において夫－妻の関係は、特に情緒的な面において、妻（母）＝子どもたちの関係に比べて、はなはだ弱いものであった。それは、核家族の現象が急速に起こり、立てる母親の数がしだいに減少しはじめてから、家庭のなかで日本の父親がおかれた、外面的虚飾をはぎとられた惨めな状況がなによりもよく物語っている（文献 16 -p. 29）。日本の家族はもともと夫婦家族というべきではなく、むしろ、母子家族というべきだろう。このような家族が社会の下位システムなら、イエモトという上位システムもまた、その性格は母子集団とよばれるべきものである（文献 16 -p. 57）。日本的なものとして存在する、ヤクザ・相撲・旅館などにおいて、おかみさん、姉（アネ）さんの存在が重要であることが知られている。母性的解決は、白黒をつけず、丸く納めることである。父親は、白黒をはっきりさせて、その結果を両当事者に対して承服させる機能である。佐々木孝次は、日本的芝居の典型である「三人吉三」を例にとり、「和尚吉三は、はじめから、ことの白い黒いの基準には無関心のようすである。もっぱら争いを丸く納めて、なにをさておいても、争いのもつれから角をとることである（文献 16 -pp. 80-81）。和尚吉三は、事柄の白い黒いをはっきりさせず、紛争当事者に良い悪いの判定を示さない。自分も大きな犠牲を払うので、とにかく争いをいったん預けてくれと申し出る。それはちょうど、父親と息子たちの間にあって、一方を立て、他方をなだめながら、敵対する両者の仲をとりもつ、われわれの伝統的な母親の役割に似ていた（文献 16 -p. 131）」と、日本の解決法を解析している。日本のリーダーは、戦前の「天皇機関説」でも分かるように、欧米のリーダーとは異なる。欧米からは、戦前の天皇の存在は、天皇の命令で特攻隊として、命を投げ出した多くの若者達からの推量で、ヒットラーと同じような絶対の権力者と思われていたが、それはイメージであり、実際は、みんなの総意を聞く役割であった。最近、小淵総理が自分自身を真空総理と呼んでいたが、これが日本の最高指導者リーダーの素顔である。このことは、江戸時代でもそうであり、武家社会での忠孝の思想、明治政府の中央集権的体制、1945 年までの日本の父親（ないし戸主）には、法制的には家庭内での強大な権力が与えられていたけれども、内発的・自主的な権威性というものは本来

存在しなかったと見るのが妥当なようである（清水将之，文献20-p.195），とされている。この点に関しては，河合隼雄の「中空構造論」が秀逸である。そして，調停者としてのその行動様式は，つまるところ，日本の家庭のなかの母親になんとよく似ていることだろう。会社の幹部や政党の親分は，この点において家庭のなかの母親の，たんなるコピーと思えてくるほどである（文献16-p.83），なのである。

## 7. 2 母性社会日本の母

山村賢明は，「日本における母親は，単なる幼児体験の域を越えた存在として，子どもが「社会化」され，おとなになり，さらに死ぬまで，終生影響をあたえ，日本人の行動を規定しているものとみなされているようである。しかもそのことは，特定の母子関係をはなれて，社会的一般的に強調される傾向がある（文献16-p.146）。具体的な記述として，日本の母は，「母は自分を無にして子につくす」「母にとって生き甲斐は子である」「母は子が自分から独立し，離れてゆくことを避けたがる」「母は哀しい存在だ」「母子の関係にとって，夫＝父はあまり積極的意味を示さない」「母は子のために，しばしば夫＝父との関係で苦しい立場に身を置く」「母は子に愛着する」「母は子のためにあえて厳しくする」「母は子を業績達成にかりたてる」，「母は子にとって心の支えとなる（母のおかげ）」，「母は最後のよりどころであり，救いである」，「子は母を悲しませることを避け，何かしたとき母に喜んでもらいたいと思う」「母はありがたい価値的な存在だ」「子は母に愛着を示す」「子にとって父より母との関係の方が濃密である」「母は心から甘えられる存在だ」「母を呼ぶコトバそのものが感動的だ」「母は許しを乞うような存在だ」「母にたいしては子はいつまでたっても子どもだ」「子は母のために業績を達成しようと思う」「子は母の苦勞を，ともするとあたりまえのこのように思う」（山村，文献16-pp.151-152）。このような母親は，今の日本にどれだけ存在するのだろうか。このことは，次節で述べたい。

牧畜国家に母権社会がなかった，もちろん母性社会もなかった，ことはすでに述べた。日本は，もともとは農業国であり，仏教国であった。仏教的な世界は，最後にはだれも悪い人はいないのに，罪だけが起きている世界である。しかし，これではだれのせいかわからない。だれを非難していいかといっても，非難すべき相手はいない。つまり，この世界は，個々の個性や人格の主体性，自我の境界が打ち消された混乱混沌とした状態だ，とガンザーレイン（米国アトランタ市在住の精神分析学者）は体験してしまう（文献7-p.111）のである。父性社会の父親イメージは，「一神教で父権社会での父親のイメージは，家庭にあっては誤ることのない家長であり，社会にあっては正義と勇気と寛大さをその身に備えた君主であり，宗教では父なる至高の神であったからである」（文献17-p.101）。ユングの父親の神話類型の記述も，「男性・法律・国家・理性・精神・自然力などに関係を規定します。父親は創始者であり，権威であります。従って，法律であり，国家であります。彼は風のように世界の中を動くものであります。創造的な風の息吹であり，精神であります」（文献17-p.102），である。父なる神は，神は唯一絶対の超越的創造神であり，万有の主権者とされ，その神と人間の関係は「契約」の観念に代表されるように，情緒的というより，意志的・倫理的色彩が濃い。モーゼの十戒にもっとも端的に示されている（文献17-p.128）。これに対して，わが国の処罰が，「処罰については，一定のルールに則って行われるべきもので，処罰する側と処罰される側との関係を越えたルールの存在によって，はじめて処罰の納

得性は担保される。従って、内申書の問題にせよ、規律違反に対する懲戒にせよ、権限の感情的な使用は、権威を損なうもので、それは一時的に効果を収めても、長期的にはマイナスに作用することの方が多い（瓜生武，文献7-p.91），と本来は父性的であるのに、母性的要素が入ってしまう問題点を指摘している。でも、これが母性社会の処罰の方法なのである。感情が入らない懲罰は、「冷たい」との批判を受け、社会からも本人からも受け入れられないからである。

原初的母子一体の世界は、すべてあるものをあるがままに認め、許し、受け入れる世界と言える。物事を区分したり裁いたりする規範的原理でなく、総てのものを無差別に包み込む抱擁の原理である（松本滋，文献17-p.123）。日本の宗教伝統を見ると、その基本的な原理は、父性的というより明らかに母性的である。すなわち、あるべき姿を強調する規範の原理よりも、あるがままの姿を包容してゆく自然的原理の方が優位である（文献17-p.137）。父親の権威が失墜したといわれている。しかし、文化・宗教のレベルではもともと「母なる神」が伝統的に「父なる神」を凌駕していた。寛容とゆるしの母性原理は、規範と筋目の父性原理と何らかのバランスをとってこそ、正しく機能するのであるが、今日では社会的にも文化的にも父性原理が弱まったため、母性原理は歯止めを失って肥大化してしまった（文献17-p.141），のである。また、日本において、家長的父親が意外にもろく後退してしまったのは、父の強さやからさが、家父長制を中心にした全体的な制度的構造によって賦与されていた借りものであり、父自身にそなわった内在的な権威に裏打ちされたものではなかったからであろう（佐々木譲，文献20-p.246）。

日本の伝統的な子育て観は、植物（農作物）を育て、育つことのアナロジーで捉えられていたようである。事実、江戸期の育児書は、たびたび子どもの育つ様子を植物にたとえているし、また明治期には、養蚕と子育てを類比させているものもある。これも「育てる」営みの共通性を捉えているのである。「育てる」行為で最も重要なのは、育つという自然の営みを中心におくことであろう。それは手をふれることのできない領域であり、あえていえば神様に頼むほかない領域である（文献12-p.186）。それに対して、工業化と都市化の中での近代的育児は、むしろ工と商の倫理、つまり「作る」と「売る」によって捉えられるようになっていったと言えよう。昭和の初期でも都市で子育てされていた方々のお話は、どこかJIS規格のような標準を意識し、こうやったら良いか、ああやったら良いかと工夫し、それなりに能動的に働きかけてゆく姿勢が感じられる。そこには、子どもが育つことへの、あるいは育つ子どもへの基本的な信頼を失いかける契機があったように思われる（文献12-p.187）」と、工業化によって子育てが、物化していくことを指摘している。

明治10年に来日した、お雇い外国人教師エドワード・モースは、「日本その日その日」のなかで、『赤ん坊が泣き叫ぶのを聞くことはめったに無く、母親が赤ん坊に向かって癪癪を起こしているのを見たことが無い。私は世界中に日本ほど赤ん坊のために尽くす国は無く、また日本の赤ん坊ほどよい赤ん坊は世界中にないと確信する』（文献12-p.58）。しかし、いつの時代でも子育ては難しい。日本の母親が安定した母親として居れたのも、いろいろなサポートがあったからである。昔は、子育てに関わる親は、もっとたくさんいた。出産のときの「トリアゲオヤ」からはじまり、はじめての乳をもらう「チオヤ」、名前をつけてもらう「ナツケオヤ」などは、日本全国、ひろく見られた習わしであった。こうした複数の親子の結合が、共同体のひろがりをつくっていた。そして、子どもは、この結びつきの中で育てられていった（文献12-pp.92-93），のである。

明治時代の子育てと比べると、現代の子育てがいかに孤立した中で行われているかがわかる。

### 7.3 母性社会日本の母性のゆらぎ

石川(1990)は日米家族の体験的な比較から「日本人にとって、家族は意志によって『持つ』ものではなく、自己存在以前に『ある』ものである」と述べている。個々の母親の母性愛の問題ではなく、日本人にとって家族は大いなる母性を守られた場であり、個を産みだす母胎であると同時に個を呑み込む闇である(山下景子, 文献15-p.219)。最近になって、母性文化の特徴である「場」が変化してきた。それは、個人を大切に方向へと、日本の家族観は変化し、経済的な発展と相まって、核家族が急激に実現した。形態はできたが、それを支えるための家族の意識は、昔のままと代わらぬところがあり、そのギャップのために、多くの家族問題が生じてきた(河合隼雄, 文献15-p.6), からでもある。

父性の弱体化は世界的な潮流だが、それは父性の確立の前段階である、母性の確立に問題が起こってきたからである。もともと、父なる神は、意志のある発達に伴う、より分化した父子関係の現れる段階に心理の根源を有し、条件的規範(父性原理)を主要な原理としている神である(文献17-p.126)。超自我がエディプス・コンプレックスとの関連で出現してくることはすでに述べた。現在問題になっているのは、父親との関係が出てくる前の母子関係の絆の問題である。アンナ・フロイトは、このような超自我形勢の規制について、攻撃者との同一化を提唱した。この規制は、超自我の発達に必要な一つの前段階である。幼児は自分を批判する代わりにその批判を外界にふり向け、厳しく他者を批判するようになる。幼児は、自分の内部の悪しき衝動は他者に投影して、もっぱら他者だけを厳格に責める。これは、超自我発達の前段階であるが、やがて取り入れられた批判が内在化し、自我が自分の行動や内面的な過程を十分に自覚して、他者に対する不寛容さが消え、批判が外部にではなく自分自身に向けられるようになると、真の意味の超自我が成立したことになる。いずれにせよ、このような超自我形成理論から、子どもの超自我の正しい発達ためには、まず親の超自我のあり方や、子どもの指導のしかたが重要である(文献20-p.119)。シュヴィングによると、母性とは、まず相手の身になって感ずる能力、子どもの必要とするものを直観的に把握し、いつでも準備して控えていることである。そして精神病の患者は、すべての幼児期にこのような献身への準備性—母性をそなえた母性—を欠いていたという(文献20-p.123)。

アンナ・フロイトは、施設では母親不在の空白を埋めるべく、母親代わりが十分に機能できるように考慮されているが、一方、父親不在の空白を埋めるための努力はまったく払われていない(館哲朗, 文献17-p.175), と述べている。母親の機能が不十分であるため、ホスピタリズムにかかっていた養護施設の乳児のために、母親の機能を充足させた歴史がある。しかし、超自我や自我理想を形成するための父性機能の充実がいまだに十分ではない。だから実際に養護施設児の症状は、神経症より非行や反社会的行動が多い。このことは、養護施設児に対する父性機能の不十分さがあるのは確かだが、実際の養護施設では、子どもたちに対する叱責や躰けは、十分なされている。養護施設児の方が、同年令の家庭児より、身辺自律や社会性の自立ができています。それができないと養護施設に適應できないからである。問題は、現在の養護施設には、ホスピタリズムを防止できるくらいの母性はあるが、叱責や責任を内在化できるほど強い母性的絆がないことで

ある。そして、養護施設児に特有のプレイが、現在では家庭児のプレイにも見られるのである。このことは、家庭児の母子関係の絆が養護施設児なりに低下してきたことを、疑わせるものである。

父性機能と母性機能は双補的なものである。ストーラーの研究によると、前エディプス期における父親の重要な機能を4つあげている。「母親を支え、助ける機能」「報酬と懲罰とにより子どもの行動を直接的に修正する機能」「同一化のモデルとしての父親の機能」「愛情対象としての父親の機能」(文献17-p.188)。父親の役割とは、子に対して「安全な場所」をつくる役割を持った母を、安全にすることにつきる(文献8-p.112)。母性原理はつなぐ機能を持ち、父性原理は切断の機能を持つ。母性原理の欠点は、母親の膝元を離れさせないことである。人間関係に論理的でないしがらみができるのである。

乳児期に健全な母子関係を持った人は、エディプス期に父親の助けを借りて、両親に反抗できるのであるが、絆が弱いと、反抗は即関係の切断を意味する。だから、切るに切れないしがらみを抱えることになる。この感情が、内在化しないと、悪いのは全て自分以外の人となる。幼い子どもは自分が石に躓いて転んだ時でさえ、その責任を石に課す。母親は、子どもを受け入れて、石を悪者として叩いて子どもの感情をなだめる。子どもの感情が人間に向いた時は、最初の時点では、母親がこれを受ける。母親が受けきれないような攻撃は父親が受ける。この攻撃を親が確固として受けとめるには、「子どもに優る体力を持つよりも、動じない意志やそれを支える信念が必要であろう。しかし、そのためには、親の行動が恣意的なものでなく、社会の規範に従い、その意味で社会から支えられているとの実感が必要であろう」(瓜生武、文献17-p.80)、となる。社会構造と個人を仲介する父親の役割の中で、その双方にとってもっとも重要なのは、子どもをその社会構造に適合するように養育・指導し、社会へ送り出すという社会化の役割であり、父親の機能もほとんどそこに集約して観察することができる(速水洋、文献17-p.148)。現代社会においては—父性的宗教の伝統がない日本では特に—父親的権威の衰退のもとで、権威への対応を知らない子どもたちと、権威を取り入れ、自己の役割へ統合することに必ずしも成功していない指導者が生み出されやすい土壌があり、それが問題解決の糸を複雑なものにしている(速水洋、文献17-p.146)。現代の日本の家庭では、もし子どもが母親に強い攻撃性を向けるという事態が生じたとすると、それは、父親が子どもの攻撃性の方向を自分へ向けさせる「家父長的」権威としての役割を果たしていない証ともなろう。その場合、何らかの理由で、母親が「家父長的」権威の担い手になってしまっているのである(速水洋、文献17-pp.151-152)。母親が家父長的になればいいほうである。母親が家父長的に子どもに振る舞えるためには、その前段階に母子の絆がしっかりと結ばれていなければならない。母子の絆をしっかりとらせることを援助するシステムが、脆弱に成ってきたのである。家族のひとりが「自由に自分の人生を生きたい」と志向しはじめ、家族がその機能を成員全体の福祉にかなって実現することがむずかしくなってきた(氏原寛、文献15-p.67)。父親が弱くなったので、母親も弱くなった。氏原寛の言うように、両親が家族全体の奉仕者でなくなってきた。このような環境で育った人が親になると、「現代人の自我は、自分の感情を一人で処理するのには、あまりにも弱い。相手を自分の感情の渦の中に巻き込むことで、心のストレスを解消しようとする(文献6-p.42)」ような人が、増える結果になる。養護施設で育った人が親になった時に、愛情のかけかたが分かりにくいといわれているが、それ

が社会全体に拡土している。

それでも、日本にはまだまだ母性社会が残っている。それは、切るに切れないしがらみを抱えた社会だとも言える。『近代人』であろうとする人は、個を重んじたくなる。だからできるかぎり人間関係を断とうとする。かくして、日本の近代人は西欧人が想像のできない奇妙な孤立状態におかれるのである（滝口俊子，文献17-p.65）。虐待を生じる家族には，社会的な孤立傾向がある（文献14-p.128）。境界例のクライアントの増加も，母性段階での絆の障害が，弱い父性とあいまって，自己の感情の内在化を妨げ，攻撃を外にしか向けえなくなり，相手を巻き込むことでしか繋がりを持てない人の増加を意味しているのではないだろうか。

子どもを産み，育てることが，あくまで個人の自由意思にゆだねられるかわりに，今度は，育てることも個人の自由と同時に責任であるというのが，いまの自由競争社会である（文献7-p.222），ことが生じる一方，「現在の環境というのは，構造があいまいで，若い人が自分の欲望を自律的にコントロールしにくいのです（文献8-p.179）」，という自由競争社会に必要な父性が足りずに，実際の母親との絆が弱っているのに，母性文化だけが残っているのである。このことは，少年非行に明確に現れている。昨今の非行の一大特徴は「低年齢化」であるが，低年齢化した少年たちのうち，女子青年が占める割合が，かなりの勢いで高くなってきており，とくに「問題の多い子」の中で，女子の占める割合が増えてきた（文献10-pp.3-4）。離婚請求の原因が「暴力」といえば，古来より夫から妻への暴力と決まっていたが，この常識が破られたのも現代の特徴である。妻の暴力に耐えかねて，相談に行ったり家庭裁判所に調停を申し立てる件数は最近激増している。子どもの家庭内暴力が，わかってもらえぬ親への最後のサインであることと一脈を通じるものがある（空井健三，文献20-p.240）。女子にとって，理解者を得るのは大変なのである。その基本に母親との同一視の問題が存在していると思われる。石附は「父子対決によって立ち直るのは，やはり親子間に基本的な信頼感が成立しているからであろう（文献10-p.26）」，と基本的信頼感の成立の重要性を指摘している。基本的信頼感は母子関係を基礎としているのである。今，そのゆらぎが一番大きいのではないだろうか

これらの現象を起こしている基礎に現代社会の在り方の問題がある。それは，現代の女性は，「子どもを産み育てることの中でこそ女性は成長する」という伝統的な価値観と，「子どものために，家庭に閉じこもれば，女性の人間的な成長は止まる」という新しい価値観がともに存在する，混迷の状況に生きている（文献18-pp.213-214）のであり，「最近の育児のファッション化にともなう子どものペット化」である。これまでは，問題として，主に過保護・化干渉・母性過剰の母親像がとりあげられてきたが，その対極として，精神的には娘のままの母親であり，こちらの方が増加しそうな気配がある（文献18-p.227）」のである。矢野は「過保護の母親，娘気分の母親という両極端に共通して欠けているのは，社会的視野である。皮肉なことに，社会的視野をもった母性がなければ，子どもをとりまく環境はよくならない（文献18-p.227）」，と主張するが，「社会的視野を持った」というのは，本来は，父性の役割だったはずなのだが。

このように見てくると，父性の弱体化以上に，母性の揺らぎがあるのが，グローバルな現状であろう。日本は母性文化が支配的なので，よけいに母親の孤立化をもたらせているという，皮肉なことになっている。

## 結 論

尾方真樹の「健康な家族システムの研究」によると、健康な家族は、「母子三人そろっての話題は、父親にまつわる楽しいものが多かった。ふだん父親は忙しく、夕食を一緒にとることは難しいが、家にいるときには必ず全員で食卓につく。食事時は、テレビを消して話し合いの場としている。開放的で明るくかつ柔軟性に富む家族である。この家は外界に対しても開放的で、子どもの友人の出入りも多いようである。(文献 21-p.72)。家族にとって父親の存在感が強いことである(文献 21-p.77)。母親に、父親(夫)のことを尋ねると、嬉々として話し出し、積極的に夫の写真を見せたり、父親をはめていかに自分にとってもったいないほどの素敵な夫であるかを伝えようとする(文献 21-p.78)。家族の個人(特に子ども)の主体性が尊重されている。誰か他の成員が代弁したり、話を横取りすることはなかった(文献 21-p.81)、である。健康な家族は、父性と母性のバランスが取れており、子どもの主体性が尊重されていて、開放的である。しかし、どうすれば現在の日本で、このような家族がつくれるのだろうか。

夫婦と子どもによる核家族は、夫は仕事、妻は家庭という性別役割分業によって、経済機能を夫に一任し、家庭機能を妻に一任することで、なんとか維持されてきた。それは三世代同居家族のしがらみから嫁を開放し、夫婦単位の家族という新しい家庭の理想像とされた時代もあったが、家庭のなかで居場所を失った夫と、家庭に閉じこめられた妻という新しい問題を生じさせた。また、経済的な理由からであれ、自己実現の要求からであれ、多くの女性が家庭外の労働に出るようになり、性別役割分業にもとづく核家族は変化を余儀なくされている(山下景子、文献 15-p.219)。今の女性は働きたがっている。東山弘子は、「女性たちは何故働くのか。女性たちは、仕事を通して人間として豊かな体験をし、人格が豊かになっていく、このことのために働くのだ。家庭から社会に出たのは、まず自分の人生を豊かなものにしたいという願いからであり、それが家庭のなかに反映することを望んでいるからである。子どものことはそっちのけで、なりふり構わず働くということではなく、働くことによって手に入れた家庭の社会化、開かれた家庭という姿を土台にして、子どもたちに人生の意味を教え、人間的な体験を深めさせることができると信じて働くのだ。自己実現とか自己確立は、家族との関係から切り離れたところにはありえない。切り離れた場合、家族に何かが起こる。共働きはバランス感覚である(東山弘子、文献 15-p.209)。核家族化し、夫婦単位で暮らす人々が増加しているが、日本ではまだ死に至るまで夫婦で、配偶者が亡くなったら一人で暮らすというレベルまでの個人主義には至っていない(東山弘子、文献 15-p.211)と、その心理を分析し、まだまだ欧米並みの個人主義まで精神性が自立していないことを指摘している。今日の子どもたちがいろいろの行動でもって無言で求めているのは、ものまねや借りものの親ではない。個性的に生きている親と、そのような親が作りあげている個性的な家だろう(文献 10-p.265)、と佐々木譲も個性の確立の必要性を強調している。ユングの考えかたの素晴らしいところは、一方方向で考えないところである。母性文化日本は、「和」と「みんな一緒」が強調されてきた。父性文化は個の確立の文化である。確かに、己と逆のものを統合するのが、個性化の過程ではあるが、日本文化の対極は西洋文化なのだろうか? もしそうであるのなら、西欧での父性の弱体化は説明できない。

日本とミクロネシアで、父系社会での女性の自立、母系社会での男性の自立という動きが顕著

にみられる。われわれが、母系社会の女性の生きかたから学ぶとすれば、女性の自立は、経済的裏づけのもとに、家事・育児の共同、女性の社会的連帯というしくみを女性自身が作りだすことであろう（文献1-pp.267-268）、と須藤が言うのも、一つの提案である。

しかし、父系社会日本では、ずいぶん女性の自立は進んだ。しかし、問題が解決しないどころか、問題は深まっている。須藤のいう、「女性の社会的連帯」というのは、昔の日本にはかなりあったことである。女性の自立は必要であるが、これでは改革にはならないのではないと思われるからである。菅原眞理は、『新家族の時代』（中公新書、1987）で、農業社会に適していた大家族、工業社会に適していた核家族にかわって、サービス経済時代に適応する家族は、個人を核としてゆるやかに結びつく家族になる（文献18-p.142）と未来予測している。サービス経済時代に、家族にどのように機能が残っているというのか？それよりは、小此木啓吾のいうような、「家族という言葉をやめて、ヒューマン・サポート・ネットワーク」を作り上げる方がよいのかもしれない。

双補性という観点からすれば、日本が「父系社会・母性社会」であるとすれば、西洋のような「父系社会・父性社会」を求めるのではなく、また「母系社会・母性社会」の古代に戻るのでもなく、「母系社会・父性社会」を目指すのが、真の意味での今の日本の双補性ではないだろうか。この社会は、女性が政治・経済システムを運営し、社会規範はハッキリしたルールを決めて守り、それに対する違反者には、白黒をハッキリつけて、断罪する厳しさをもった国である。宗教は絶対者を信仰する一神教である。このようなシステムと今の日本システムである「父系社会・母性社会」とがバランスされれば、われわれはハッキリした社会的な枠組みの中で、個性を発揮できるのではないだろうか。大多数の女性が政治と経済を運営すれば、戦争は放棄されるだろう。貧富の差が解消されるだろう。男たちは、母性を子どものように求めずに、その本質を今よりも理解するであろう。女たちは、男社会に対するコンプレックスから開放されるため、本来の持ち味がでるのではないだろうか。

## 文 献

1. 須藤健一（1989）『母系社会の構造』紀伊国屋書店
2. フロイト, S（1954）『自我論』（井村恒郎訳フロイト全集4巻）日本教文社
3. 吉本隆明（1993）『時代の病理』春秋社
4. ラカン, J（1986）『家族複合』（宮本忠雄・関忠盛訳、原著1938）哲学書房
5. 小此木啓吾（1983）『家族心理学のすすめ』小学館
6. 小此木啓吾（1983）『家庭のない家族の時代』ABC出版
7. 小此木啓吾（1991）『エディプスと阿閼世』青土社
8. 小此木啓吾（1999）『精神分析のおはなし』創元社
9. 斉藤 学（1995）『「家族」という名の孤独』講談社
10. 佐々木 譲・石附 敦（1999）『「非行」が語る親子関係』岩波書店
11. 岡田康伸編（1987）『子どもの成長と父親』朱鷺書房
12. 横山浩司（1986）『子育ての社会史』勁草書房
13. ジョン・フリエル, リンダ・フリエル（1999）『アダルトチルドレンの心理』（杉村省吾, 杉村栄子訳）ミネルヴァ書房
14. 西澤 哲（1994）『子どもの虐待』誠信書房



15. 河合隼雄・東山紘久編（1998）『家族と福祉領域の心理臨床』金子書房
16. 佐々木孝次（1982）『父親とはなにか』講談社
17. 馬場謙一，福島 章，小川捷之，山中康裕編（1983）『父親の深層』有斐閣
18. 矢野裕俊・埋橋孝文・矢野隆子・埋橋玲子『教育・仕事・家族』
19. 菅原眞理『新家族の時代』（中公新書，1987）
20. 飯田真他編（1983）『精神の科学第七巻——家族——』岩波書店
21. 日本家族心理学会編（1986）『ライフサイクルと家族の危機』金子書房。
22. 河合隼雄（1976）『母性社会日本の病理』中央公論社

（臨床心理実践学講座 教授）